

北陸センター所長賞 受賞

福井県立高志高等学校

2年 奥島 由樹子 さん



作品名：「「常識」を疑え」

▽受賞のコメント

昨年に続き2回も北陸センター所長賞を受賞できたのは光栄なことです。私の経験が世界のために役立つのであれば嬉しいです。原爆ドームを実際に訪れ、食欲がなくなるくらいの衝撃を受けたときの自身の想いを作品で訴えたかったです。将来の夢はフリーランスでもいいので記者になりたいです。自分が書いたものを発信し、みんなに知ってもらいたいと思っています。

▽作品本文

学校の英語の授業で、紛争が続くマドゥーという国について調べるようになった。負傷する兵士や栄養失調で亡くなる子供など、悲惨な現状を知った時、私の胸の奥が熱くなった。

一年前の夏、私は広島県の平和記念資料館へ行った。せっかくの旅行が暗い雰囲気になるのを危惧し、なんだかなあ…と重い足取りで向かった先にあったのは、私の想像をはるかに超える、過去の記憶であった。

皮膚のただれた手で真っ黒な赤子を抱きかかえる母親。ガラスの破片が身体中につきささった幼い男の子。被爆者やその家族に写真や人生の記録。それら全てから「助けて」と悲痛な叫びが聞こえてくるような被爆の実相。

まさに地獄であった。

一九四五年八月六日の朝、太平洋戦争で交戦した米軍が日本の広島市に対して原子爆弾を投下した。これは人類史上初の都市への核攻撃であった。一発にして一瞬で街の全てを破壊したこの原子爆弾は、その三日後に長崎にも投下され、まもなく日本は終戦を迎えた。

資料館でふと目が止まった「真珠湾」の文字が、幼い頃訪れた、あの黒い海を思い出させた。真珠湾攻撃。太平洋戦争の発端ともいわれるハワイ州オアフ島真珠湾に対する、日本軍の奇襲攻撃である。日本軍の勢力によって沈んだ戦艦は、現在もその大きな船体から黒い油を出しながら海に潜む。その暗い、深い海が私の小さな身体をすいこんでしまいそうなほど恐ろしく感じられた光景を、かつて我が国がつくったという事実が何度も何度も脳裏をよぎった。日本が受けた悲惨な被害を見る度に日本が及ぼした悲惨な被害を思ってしまい、なんとも言えないモヤモヤを感じた。

平和記念公園で手を合わせた後、私は母に思いを打ち明けた。母は少し黙った後、優しい口調で語り始めた。

私の曾祖父は、母が十歳の頃に亡くなった。

生前はよく、中国で戦っていた際に鉄砲で撃たれてできた背中の子供の大きな傷について話してくれたらしい。

「身内のそういう被害を実際に目にとると、敵国に対して嫌悪感を抱いてしまうのは当然。お母さんも大じいじの話聞いた時はそうだった。でも、戦争って、どっちかだけが苦しいなんて、そんなこと絶対ないから、広島も真珠湾も、どっちもの過去を受け入れて、今見たものに対して、そうやって多面的に考えて、疑問を持つのって、きっと大事よ。」

先日、戦後七十五年の特集番組で、日本の被爆者と原爆を開発したアメリカの科学者の対談を見た。一言の謝罪を求める被爆者に対して、科学者は、真珠湾を引き合いに出し、謝罪を頑なに拒んだ。私の胸には、一年前に感じたあのモヤモヤが蘇る。

過去の日本やアメリカのように、紛争をしている国はマドゥーだけでなく、多く存在する。私たちのような歳の子供は、もう立派な戦力として戦場へ向かう。そして恐ろしいことに、戦争が存在する世の中に生まれた彼らにとってそれは「常識」なのだ。

戦争を知らない世代のみの日本が近づいていることは、その当事者である私でさえ怖い。過ちを繰り返さないために、まずはその過去を多面的に見ることが大切だと思う。

「原爆投下は日本を終戦に向かわせた、正しい行為であった。」

多くのアメリカ人は学校でこのように学ぶ。彼らの「常識」だ。もちろん私たちの頭にそんな常識は無く、了解し難い。だからこそ、彼らには、その常識を疑って見てほしいと思う。武力同士の争いに「正しい」ことなんてあるのか、とか。私が真珠湾へ行き、彼らの視点から考えたように、彼らにも、考えてほしい。

今、武器を持って戦う人々に告ぐ。その武器を持つ自分自身を、その常識を、疑え。